

相撲記

よもやま

―すももう四方山ばなし―

新書

川瀬一雄（春日山町一丁目出身）

相撲は日本の文化

今、江戸東京博物館で「両国と大相撲展」が開催されている（十二月十八日まで）。屏風絵から錦絵、番付をはじめ相撲の歴史や諸資料が展示されている。相撲は日本の國技として栄え伝承されて今日に至っているが、この展覧会を見ればその奥深さ、美しさが理解して戴けると思ふ。紹介に及んだが、相撲は真に日本の誇り得る文化なのである。昔は力士は神の力を現すことの出来る者として尊重され、遇されていたと聞くが、そうした史実に根ざした輝かしい歴史や伝統があることを忘れてはならない。

世紀の大横綱双葉山と木鷄の話

昭和を代表する力士と言えれば何んと言つても双葉山である。相撲の真髄を表現する名言は「心技（氣）体」だが、これ

を備えもった名力士であった。彼の残した六十九連勝の偉業は未だに誰も破ることが出来ない大記録である。昭和十四年一月場所四日目に平幕の安芸の海（後の三十七代横綱）に敗れるのだが、この時の寓話が残されているので紹介しよう。

彼の後援者で精神的に支え指導された安岡正篤先生に「ワレイマダ モツケイタリエズ フタバ」と打電した。双葉はかねてより安岡先生が中国の古典にある「木鷄の話」を聞き心に強く響くものがあり自らの座右として精進したと言ふ。

その話と言うのは或る日さる王が素質のある鶏を手に入れ闘鶏師の名人を呼びこの鶏を天下一の闘鶏に育てるように命じた。十日ほどして王が「もう使えるか」と聞くと「今空威張りの最中であつても」と答えた。せつかな王はそれか

ら又十日程たつてから「もういいだろう」と催促すると「まだ駄目です。敵の声や姿を見るとやたらと昂奮し飛びかかろうとします」。それから又十日程たつた頃王は「どんな具合か、強くなつたか」と尋ねたところ「強くはなりましたが相手によつては馬鹿にして見下すくせがあります。まだ駄目です」と言う返事。

それから又十日程たつた或日漸く闘鶏師から返事が来た。「もう大丈夫です。内面的にも徳が充実し如何なる敵に対しても無心であたかも木で彫つた鶏の如く不動の構えが整い真に天下無敵です」と。人生の教訓としても実に味わい深い内容でありもつて学ぶべしである。

外國人力士の台頭と相撲界の将来

相撲界も国際化したと言えはそれまでだが番付を見ると今をときめく一人横綱朝青龍をはじめ幕内力士四十二人のうち外國人力士は実に十二人いる。然も三役八人中外國人力士が半数の四人を占めるとあつては文化た國技だと言つて胸が張れないのが現実である。しかし強いことは確かだし日本人力士が勝てないのだから致し方ない。

さりとしてこの儘で良いとは言えず、協会としても対策を考えねばなるまい。すばり強い力士の育成に必死に取組むべきである。親方を動員し組織的に科学的に稽



古指導を行い第二の双葉、大鵬、千代の富士等々を育成し外國人力士に対抗すること相撲界が隆盛するチャンスが生れて来ると考えている。日本人力士よ命かけて稽古し強くなれと言いたい。



郷土力士霜鳥への直言

霜鳥がここに来て低迷しているのは怪我や体調不良もあるが、技と氣の二面も大きな要因と考えられる、先ず立合いの研鑽が必要だ。立合いは五分で良い。教えて出来るものではなく稽古を通して体得する他はないが、もつと研究し心がけるべきである。

次に稽古不足から来る踏み込みが弱く相手に対する圧力がないから受身の相撲になつて了う。得意の右が差せば良いが、相手も研究しているのでいつも思うように差せない。いきなり右差しに行くのではなく左手を先にとり、右が強いことから右から押つけて出る相撲をとれば今の様なことにはならないと思うが…。

右四ツがっぷりの霜鳥の相撲は横綱大関と言えども倒せる力をもっている。大器である。郷土の期待に応える奮闘を祈つて己まない。

(日本実業団相撲連盟 副会長、

東京農業大学相撲部OB会 会長)



前列左より、双葉山、川瀬(筆者)、鏡里



左より、名寄岩、双葉山、羽黒山